

えひめの歴史文化モノ語り

県歴博収蔵資料から ⑩

「大鏡」は平安時代、文市に関する説話も見える。徳天皇から後三条天皇まで 神社には「日本総鎮守 大(850)1025年)の 山積大明神」と書かれた木出来事を紀伝体でつづった 造の扁額(へんがく)が保歴史物語で、11世紀後半、 管され、藤原佐理の筆と伝12世紀初頭に成立した。

中には伊予国に関する記 慶7)年に生まれ、998 述も見られる。例えば、関 (長徳4)年に没した。平東の平将門の乱、瀬戸内海 安時代中期の貴族・名書家藤原純友の乱に関して、 で、小野道風、藤原行成と将門は天皇を討ち取って、 ともに「三蹟(さんせき)」純友は関白になろうと2人 として知られる。

で共謀し、乱を起こしたと 「大鏡」巻3「実頼」の記されている。史実か否か 中に逸話として次のようには不明であるが、「大鏡」 書かれている。

成立時には共謀説が流布し 藤原実頼の孫で大宰大式(だざいのだいに、大宰府)いたことがわかる。 また、大山祇神社(今治)の(次官)を務めた佐理は、

平安時代の歴史物語「大鏡」

伊予国の説話が随所に

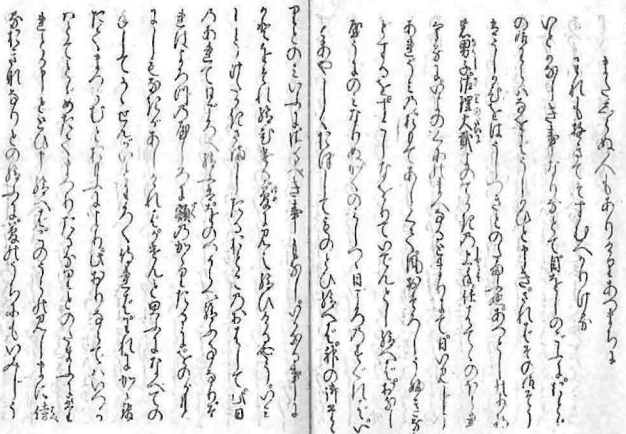
世に聞こえた書道の名人で、995(長徳元)年に九州での任期が終わり、京に戻ろうと瀬戸内海を航行していた。伊予国の手前の港で海がひどく荒れてしまつ。少し天候が回復し船出しようとすると、やはり海が荒れる。すると佐理の夢に気高い様子の男(三島明神)が現れ、「実は私があなたを引き留めているのだ。ぜひ私の神社の額を書いてほしい」と懇願した。

何日もの間荒れ続けたとも思われぬほど晴れ渡り、大三島の方に向かって追い風が吹き、飛ぶように船が走り着いた。そこで大山祇神社に参詣し、神前で額を書いた。その後の航行は平穩であり、無事、京に戻ることができた。

「大鏡」に見える佐理と大山祇神社の説話はその後、伊予国内に広まった。

例えば今治市大西町紺原の神社祭祀では、船御輿(ふなみこし)と呼ばれる船形屋台が登場し、船上に佐理と三島の神を模した人形を乗せる。また、上島町弓削明神には佐理が漂着した伝説があり、「藤原佐理卿漂着之浜」と刻まれた石碑が建っている。地域の伝承・伝説として、この説話は今に伝わっている。

「大鏡」巻3(江戸時代刊、県歴史文化博物館蔵)



(専門学芸員・大本敬久)

〈随時掲載します〉